

# 農業技術情報

2022年4月28日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所 015-572-3128  
JA幕別町 0155-54-4118  
JAさつない 56-2131  
JA帯広大正 64-4591  
日甜幕別原料事務所 54-2756  
幕別町農林課 54-6605

## 秋まき小麦

### (1) 2022年産きたほなみの生育状況

起生期は平年より4日遅かったものの、4月は温暖に経過したため生育は平年並に回復し、幼穂形成期もほぼ平年並に迎える見込みです。

本年は茎数が多い傾向で、鎮圧（ローラーがけ）を行う場合、幼穂形成期までに終わるようにしましょう。今後の施肥については茎数や葉色を参考に判断しますが、不明な点はJAまたは普及センターにご相談ください。

表1 きたほなみの生育（4月28日 幕別町14ほ場）

	2022年			平年値 (幼穂形成期調査)	生育期節	幼穂形成期
	平均	最大	最小		2022年	5月1日(見込み)
茎数(本/m <sup>2</sup> )	1,876	2,728	753	1,561	平年値	5月1日
草丈(cm)	19.6	24.1	12.4	13.5	早晩	±0(見込み)
葉色(SPAD)	48.8	53.6	38.4	—		

### (2) 窒素分肥

幼穂形成期頃の窒素分肥は、一穂粒数の増加へ高い効果があります。施肥量は4kg/10aを基本に起生期頃（4月上旬～中旬）に施用した窒素量とあわせて8kg/10aを超えないよう加減します（表2・および前回4/2の技術情報を参照）。葉色が薄い・茎数が少ない場合は早急に行い、葉色が濃く茎数も多い場合は窒素量を減らすなど散布時期・量を調節します。（「きたほなみ」は最終穂数600本/m<sup>2</sup>程度に抑えるのがポイント！）

表2 きたほなみの幼穂形成期窒素分肥量の目安

茎数の目安 (4月下旬時点)	窒素施肥量 (kg/10a)	葉色 (SPAD) の目安 (4月下旬時点)	調節対応
2,000本/m <sup>2</sup> 以上	4kgを基準に（起生期～幼穂形成期の合計分肥窒素量は8kg/10a以内とする）	濃い（約46以上）	窒素量を減らす
2,000本/m <sup>2</sup> 未満		薄い（約46未満）	早急に行う

今年は部分的に茎葉が黄化しているほ場も散見されます。可能であれば、生育の劣る部分だけ窒素で1～2kg/10a程度多めに追肥するのも有効です。

### (3) 植物成長調整剤

過繁茂で倒伏が懸念される場合は植物成長調整剤の使用も検討しましょう。「サイコセルPRO」は「幼穂形成期」1回、「出穂前20～10日」1回の計2回までの使用が可能です（表3）。

表3 植物成長調整剤の使用例（秋まき小麦）

薬剤名	使用時期	使用量 (m <sup>2</sup> /10a)	使用回数	備考
サイコセルPRO	幼穂形成期	150～200	1	・散布時期が遅れると効果が劣る ・高温時の散布は葉害の恐れがある ・他剤との混用は避ける
	出穂前20～10日 (草丈40～60cm)	200～300	1	